

『文学と映画』

行ったり来たり

―不急順不同、起承転結なし―
(主に韓流)

林 浩治

演技力のある女優イ・ナヨンの出演する映画はおおむね面白い。「知り合いの女」も「フリー・アー・ユー」も佳作だった。「英語完全制服」では、眼鏡をかけた地方公務員を演じて笑わせた。しかし、「私たちの幸せな時間」では一転、人生に絶望した激しく心痛む役を演じた。

しかし相手役のカン・ドンウォンには驚かされた。なぜならカン・ドンウォンといえれば甘いマスクの二枚目スター(韓国では「花美男」と呼ぶのだが……)だ。どん底を這いすり回った殺人犯という汚れ役がこれほど似合うとは思わなかったのだ。怒りの奥底に悲しみを交えた眼。虐げられた世間への復讐と狂気の目だ。その悲しみは深すぎる。死刑執行のシーンでは、人間の生死の意味に引きずり込まれる。

原作は韓国の女性作家孔枝泳(コン・ジヨン)の小説で、連池淑訳で2007年に翻訳出版された『私たちの幸せな時間』新潮社だ。男は貧しく育った死刑囚、女は裕福な家に育ちながら心に傷を持ち、自殺を繰り返す美術担当大学教授。小説を読んですぐにドストエフスキーの『罪と罰』を思い浮かべた。

『罪と罰』では、大学生のラスコーリニコフが正義のために殺人は許されるという自己の論理を証明するために金貸しの老婆姉妹を殺した。ラスコーリニコフを愛し救おうとするのは、酔っぱらいのマルメラドフの娘で、家族の生活のために春をひきいだソニヤだった。

また、柳美里の『ゴールドラッシュ』(1998年 新潮社)における、かずきと響子の関係も『罪と罰』を想起させる。黄金町のパチンコチェーンの御曹司で14歳の少年かずきは、父親の金権的価値観を継承して暴君として振る舞おうとする。ついには父親を日本刀で斬り殺してしま

うかずきに、自首するように説得するのが17歳の響子で、響子は13歳のときに輪姦され、堕胎した経験がある。ラスコーリニコフとソニヤ、かずきと響子の関係は、「わたしたちの幸せな時間」にも当てはまる。世の中の全てを憎む凶悪な殺人犯ユンスと、16歳のときにいじめから強姦されて以来、倫理的な社会に絶望するユジョン。ユンスの弟ユンスは父親に農業を教まされて言い、最後は地下道で新聞紙にくるまって死んでしまふ。ユンスは、ユジョンが歌手だった頃歌った

愛国歌を聴いて、その歌手に憧れていた。ユンスは目が見えないため、不良どもの詩いになるただただ殴られるだけだが、その純真さは、『ゴールドラッシュ』のかずきの兄で、難病を持つ幸樹の純粋な芸術性に近い。

共通するのは女性主人公の性が傷つけられていること。男性主人公が殺害者であることだ。性は生に通じ、性が犯されるというところは、命を傷つけられることと同義なのではないか。殺された側が殺した側を許す関係が愛の形として表出される。そういう小

第1回 私たちの幸せな時間

説なのだと考えたらいけないだろうか。そもそも考えていると、津村記久子の『君は永遠にそいつらより若い』(2009年筑摩文庫)に出てくる「イノキさん」も同じく性を傷つけられた生を生きる女性であること思い出す。主人公のホリガイも女性で、ここに殺人者は出せない。逆にホリガイはこれ以上の凡人はいないと思われるほどの非凡な女子大生だ。卒業までの単位も取得し、地方公務員試験に合格し、あとはバイトと学校と下宿の行き来という空白期間を

残すだけというあまりに平々凡々として、「孤独なのか幸福なのか見当がつかかぬ」くらいなのである。これも「私たちの幸せな時間」のユンスとは違ふか、離れた存在だが、そういう彼女が、イノキさんに一方ではあるが、連帯の情を抱へるのであるから、きわめて現代日本的な小説と言えようか。

話を元に戻す。小説『私たちの幸せな時間』は主人公のムン・ユジョン(映画ではイ・ナヨンが演じた)を一人称とするストーリー展開のありだに、もう一人の主人公

チョン・ユンス(これがカン・ドンウォンがやった凶悪殺人犯だ)の手記が挟まれる形でできている。ユジョンは裕福な家に生まれ、三人の兄は医師・検事・大学教授で母はピアノistだった。兄の妻たちもそれぞれピアノist・医者・女優だった。だが、末っ子のユジョンは16歳のときにお使いに行った伯父の家で妻のあるいとこに強姦されていろいろ厭世的になり、事件を隠して曖昧にしてしまった母を憎んでいる。

殺人犯のチョン・ユンスは、母に逃げられ、酒飲みで働かず暴力を振るう父親と弟のユンスとの貧しい暮らしだった。母親は逃げ、父親は自殺。孤児院暮らしになるが、目が見えないために虐められるユンスをかばい、ユンスは凶暴になっ

ていく。不良グループに入り、13歳の頃にはナンパ、輪姦、万引き、暴力といっぱしの悪党に育っていた。窃盗で逮捕され送られた少年院でも、先に入所していた「兄貴」分を半殺しにしたりする。少年院から出たあとの生活もその前とさほど変わりなく、弟のユンスは地下道で寝ているときに死んでしまふ。

その後は刑務所を出たり入ったりその日々を繰り返しているが、美容院で働く女性に恋して足を洗い、スーパーマーケットの配達の仕事をする(映画ではプロパンガスの配達

のようだった)のだけれど、彼女が病気になる金を稼ぐために再びフル仲間とつるむようになり、ついには事件を起こす。ユンスは中年女性経営者とその娘、家政婦を殺した罪で裁かれ死刑囚となった。

厭世観に囚われるユジョンは叔母のモニカ修道女に従いソウル拘留所に赴く。豊かに育ったユジョンにとってそこは知り得なかった韓国社会の現実だった。貧しい人々がいるという単純な事にすら彼女は気づいていなかったのだ。形而下ばかりか形而上も地を這う貧しい生を生きるユンスに比べ、経済的に豊かなユジョンは一般的な意味で豊かな思想性をも身につけていたはずだ。反発しいながらも次第にお互いを理解するようになるユジョンとユンスだったが、死刑執行の日には突然訪れる。ユジョンは奇跡を願って、母を許しに赴く。許すことの辛さを力まで、信すべき一点なのだ。本当に分かり合えるのは被害者と加害者であり、被害者もまた加害者であり、加害者も被害者であるというパラドックスに、許し合う平和の困難がある。

▼はやし・こうじ 文芸評論。著作に『在日朝鮮人日本語文学論』他